［特集］「私の三冊」

『かやのもり』第23号の縦組み特集として「私の三冊」を掲載します。これは近畿大学産業理工学部の教職員の皆さんにお願いして、学生諸君にぜひ読んでもらいたい本、自分が読んで面白かった（あるいはなにがしかの感銘を受けた）本、そういう類いの書物を三冊（先生方の読書歴からすれば本当に厳選されたものでしょうが）、紹介していただくという企てでした。こうした企画は、どこかこれまでにもあったかと思いますが、それでも読書の秋にふさわしいものとしてお願いしました。

読書体験を語ることは、自らのこれまでの生き様や生活、そして今ある姿を語るようですこし恥ずかしい気もしますが、私の「何とか学生のために」という掛け声に応じて、お忙しいなか多くの先生方から原稿をいただきました。ご紹介いただいた本は図書館でコーナーを設け配架する予定です（収蔵していない本はこれからそろえます）。なんとか学生諸君の図書館への関心、読書への興味を鼓舞していければと考えています。ほんとうにありがとうございました。

（論文編集委員会　委員長　橋富博喜）

依田浩敏（建築・デザイン学科）

1．谷崎潤一郎著『陰翳礼讃』、中央公論新社、一九七五年一〇月

昭和の初めに書かれた名エッセイ。照明が発達して身の回りがどんどん明るくなり、その中で日本人が培ってきた感性にそぐわない環境になってきていることを憂いている。環境エネルギー問題を抱える現代社会を再考するきっかけとなる名著。

2．尾島俊雄著『都市環境学へ』、鹿島出版会、二〇〇八年二月

建築分野において都市環境学のパイオニアである著者の自伝。第十二章の「未完のプロジェクト実現に向けて」は次世代へ向けたエールのようだが、自らが達成してしまうかもしれない勢いに圧倒される。偉大な著者と、時間・空間を少しでも共有できたことに感謝。

3．三浦捷一著『がん戦記』、講談社、二〇〇五年一一月

がん治療の名医であった著者の、自らのがんとの戦い。プロフェッショナルな立場から患者代表として、がん患者の「生存権」「自己決定権」を求めて医療制度の壁に挑み続けた二千日の全記録。人生を如何に送るべきか、生き様を考えさせる一冊。合掌。

金子哲大（建築・デザイン学科）

1．小松左京著『虚無回廊』、徳間書店、一九八七年一一月

三巻まで出版後、二〇一一年に著者が亡くなり未完の作品となったＳＦ小説。三十五光年先に発見された長さ二光年もある巨大な円筒形構造物「ＳＳ」の探査に向かう人工実在「ＡＥ」（ロボット）が、様々な地球外生命体との出会いの中で「ＳＳ」と向き合っていく。圧倒的な想像力・創造力とリアリティ、「ＡＥ」という機械の物語が知性や愛を描き出す。未完であるが故か、物語の結末だけでなく、私たち自身の現在と未来のことを考えさせられる。二〇一一年より徳間書店から三巻をまとめた単行本が発売されている。

2．池波正太郎著『鬼平犯科帳』、文藝春秋、一九六八年一二月

文春文庫より番外編も含めると二十五巻発売されている短編集なので気楽に読める。テレビシリーズや漫画にもあるが、出来れば活字から鬼平の世界を味わうことを勧めたい。江戸の火付盗賊改方の活躍を描く物語であるが、急ぎ盗（ぼたらき）を憎む人情深い盗人や優柔不断な部下など、鬼平を中心とした周辺の人々の機微を丹念に描く人間ドラマである。若い頃、こんな上司になら身を預けたい、こんな大人になりたいと思った鬼平、社会人になる前に是非出会って欲しい。

3．桐山靖雄著『密教誕生』、平河出版社、一九八四年一〇月

仏教の宗派のうち、密教（真言宗）の教義について空海の修行（成長過程）を通して説明していく小説である。「宗教なんて！」と無関心だった高校生に、密教という宗教の教義が段階的に世の中の出来事の感じ方を修練していく、論理的で哲学のようなものであること教えてくれた。決して信心深くなったわけではないが、知らない世界のことを知ることの大切さ、知ることによって世界が違って見えてくることを学んだ一冊である。なにより小説として望外におもしろい。

大木　優（情報学科）

1．下村湖人著『次郎物語』、新潮文庫、一九八七年六月

次郎の幼少期から青年までの心の成長が書かれている。若いころに何回か読み直した本である。一人の人間の心の成長を知ることは、自分の成長の糧にもなると思われる。読まれていない人にとっては、おすすめの本と思う。「白鳥、蘆花に入る」という言葉が有名である。

2．ヴィクトール・E・フランクル著（池田　香代子訳）『夜と霧』、みすず書房、二〇〇二年一一月

著者のナチスの収容所での体験記である。どんな状況であれ、生きていること自体が幸せ、希望、目的を持ち生きる大切さを語っている。生きるという大変さと意義を考えさせてくれる。

3．高木俊朗著『インパール』、文藝春秋、一九六八年

第二次世界大戦末期に日本軍がビルマで実行した作戦である。失敗すると明らかにわかっている無謀な作戦が、立案され実行されていく。戦争時だけではなく、今の時代でもこれと同じことが大なり小なり繰り返されている気がする。今の世の中でも、明らかに失敗する、無謀であることが、進められてしまうこともあるということを知っておく必要がある。

寺井　仁（情報学科）

1．ハワード・ガードナー著（佐伯胖・海保博之監訳）『認知革命』、産業図書、一九八七年八月

心の科学としての認知科学がどのようにして生まれたのか。哲学、心理学、人工知言語学、人類学、神経科学といった認知諸科学との関係とその歴史は知的興奮に満ちています。

2．トーマス・クーン著（中山茂訳）『科学革命の構造』、みすず書房、一九七一年三月

科学は思考の枠組み（パラダイム）により支えられています。一方、このパラダイムを乗り越えることで科学は大きく進歩してきました。科学は真理の探求であり、科学理論は真理である、と思い込んでいるあなたにうってつけです。あなたの科学感に革命を与えることでしょう。

3．ダニエル・カーネマン著（村井章子訳）『ファスト&スロー　上・下』、早川書房、二〇一四年六月

我々の日常は意思決定の連続ですが、必ずしも合理的な意思決定を行っていません。意思決定研究の第一人者でありノーベル経済学賞受賞者である著者が、意思決定のメカニズムを様々な研究例や事例を示しながら平易に解説してくれます。

勝瀬郁代（情報学科）

1．青木裕司、片山まさゆき著『サクサクわかる現代史』、メディアファクトリー新書、二〇一〇年三月

予備校のカリスマ講師と漫画家のコラボにより、難解な現代史を扱いながらも、わかりやすくおもしろく読める本となっている。世界を一つの教室とみなし、各国が個性的な生徒となって登場し、現代史を教室内の事件として捉える。現代史の入門書として最適。

2．平野啓一郎著『私とは何か「個人」から「分人」へ』、講談社現代新書、二〇一二年九月

芥川賞作家平野啓一郎が提案している「分人」思想をわかりやすく解説した本。メディアの発達に伴い人間関係が複雑となった現代社会を生きる我々に救いをもたらす思想である。「私とは何か」と思い悩むことの多い青年期の学生たちにぜひ読んでもらいたい。

3．松尾豊著『人工知能は人間を超えるか　ディープラーニングの先にあるもの』、角川EPUB選書、二〇一五年三月

新しい人工知能技術「ディープラーニング」がなぜこれほど注目されているのか、これまでの人工知能との違いという観点からわかりやすく解説されている。今まさに、この技術に対して巨額の投資や熾烈な人材獲得競争が行われている理由がよくわかる。

坂田裕輔（経営ビジネス学科）

1．アーンスト・F・シューマッハ著（小島慶三、酒井懋訳）『スモールイズビューティフル』、講談社学術文庫、一九八六年

巨大技術が開発され、世界が改変される期待に満ちていた時期に、社会に対して警鐘を鳴らし、技術をどう活用すべきなのかを提案した。本書が提案する中間技術は、人間をサポートする技術であり、人間を使う技術ではないことから、人を大事にする社会を

つくる重要なキーワードとして、今でもじゅうぶん通用する概念である。

2．エルンスト・フォン・ワイツゼッカー著（宮本憲一訳）『地球環境政策―地球サミットから環境の21世紀へ』、有斐閣、一九九四年

地域をよくする活動をつなぎ合わせて、大きなネットワークを作り上げることが環境政策では重要だという提言を行ったテキスト。大学4年生の時に、たまたまこの本を手にして、環境問題を研究することを決意した一冊。

3．デイビッド・エディングス著（宇佐川晶子訳）『ベルガリアード物語（一～五）』、早川書房、二〇〇五年（新装版）

ファンタジーもので一番好きなシリーズ。困難な探索の旅のなかで成長する主人公の姿が描かれるのだが、大人たちの掛け合い漫才のような会話が深刻さを和らげてくれている。仕事に疲れたら、つい手にしてしまう。

長谷川徹也（経営ビジネス学科）

1．四方田犬彦著『台湾の歓び』、岩波書店、二〇一五年一月

台湾には多くの民族がいること、年代により学校教育に違いがあることなど、台湾の観光ガイドブックではわからない歴史、文化、考え方の一端を知ることができる。台湾で数多く見かける廟についての記述も興味深い。

2．西村健著『ヤマの疾風（かぜ）』、徳間文庫、二〇一五年二月

筑豊の炭鉱閉山間もないころを舞台とした物語。田川、飯塚、国道二〇一号線、飯塚オートといった身近な地名、登場人物が交わす筑豊の言葉が妙にリアルで、これは実録ではないかと引き込まれてしまうやくざの物語である。

3．小林隆、澤村美幸著『ものの言いかた西東』、岩波新書、二〇一四年八月

挨拶言葉や相手への気遣いで使う言葉などが日本地図上に示されており、地域により随分異なっていることに気づかされる。ものの言い方を7つの発想法に分類すると、言語的発想法は近畿地方が発達しているそうである。

大箸純也（経営ビジネス学科）

1．なだいなだ著『人間この非人間的なもの』、筑摩書房、一九七二年三月

高校の教科書に載っていました。はじめは意味が分からなかったけど、さすがに国語の授業、理解できたようです。人間とは？そこに存在するものを肯定した上で考えるべきものだということ。人間性ということばに限りませんが、ことばで表現して考える場合、そのことばの力、魔力に注意しなければいけないということを、気付かせてくれました。

2．高田明和著『負け犬はなぜ早死になのか』、東洋経済新報社、二〇〇六年三月

精神的なストレスは、身体に良くないということを記しています。その手の本は数多くあり、新しい本の方が内容は充実しているでしょう。ただ、女性の社会環境と結び付けて記していること、（当たり前のことなんだけど）考え方を見つめなおさせようとしてくれるところが、魅力です。

3．廣中直行著『人はなぜハマるのか』、岩波科学ライブラリー、二〇〇一年七月

脳内報酬系の話で、その内容自体は他の本でも同じようなものでしょう。ただ、人間って期待を持ってしまうもんだよ、だからギャンブルは無くならない、でも、それが今日の文明をもたらしてくれているということに、気付かせてくれました。期待しちゃいましょう。

飯島高雄（経営ビジネス学科）

1．夏目漱石著『私の個人主義』、講談社学術文庫二七一、一九七八年

夏目激石の講演集。表題の「私の個人主義」のほか、「道楽と職業」「現代日本の開化」「中味と形式」「文芸と道徳」を所収。「私の個人主義」は、大正三（一九一四）年に学習院（大学）で行った講演で、現代の大学生にとっても極めて有益である。

何かに打ち当たるまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても必要でないでしょうか。

ああここにおれの進むべき道があった！ ようやく掘り当てた！こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安ずる事が出来るのでしょう。

2．中野孝次著『人生を励ます言葉』、講談社現代新書九一五、一九八八年

作家・中野孝次が読書を続ける中、印象に残った一節を書きとめた世界の名著からの名言集。友情、恋愛、職業、生き甲斐、挫折、孤独、幸福など、青春時代に誰もが突き当たるテーマを扱っている。読み返すたびに、そのときの自分の心境を代弁する一節が

必ず見つかる。
　人の天職を発見するは最も困難である。縦（よ）し叉之（これ）を発見したりとするも、之を実行するは是（こ）れ亦（また）困難である。―内村鑑三

3．岡本太郎著『強く生きる言葉』、イーストプレス、二〇〇三年
　芸術家・岡本太郎が普段の生活の中で、動きまわりながら、ふっと洩らす言葉。これを秘書であり後に養女となる岡本敏子が書きとめて完成した岡本太郎の名言集。読めば三十分もかからないが、心に一生残る言葉に出会える。
　気まぐれでも、何でもかまわない。
　ふと惹かれるものがあったら、計画性を考えないで、パッと、
　何でもいいから、そのときやりたいことに手を出してみるといい。
　不思議なもので、自分が求めているときには、
　それにこたえてくれるものが自然にわかるものだ。

太田壮哉（経営ビジネス学科）

1．高橋信著『マンガでわかる統計学』、オーム社、二〇〇四年七月
　統計学と聞くだけで頭が痛くなる。そのような方が多いと思います。私もこの本に出会うまではそうでした。この本を読めば、数学の知識がほとんどなくても統計学のイメージをつかむことができます。「統計学を勉強したいが数学が苦手」という人ほどこの本はお勧めできます。

2．大石芳裕編『マーケティング零』、白桃書房、二〇一五年七月
　私の師である明治大学の大石芳裕教授と研究室出身の先生方で随筆をした「超初心者用」のマーケティングの入門書です。一般的な入門書とは異なり、各先生が「特に重要」と思うところを自由に書いているのが特徴です。脱テキストを目指して書かれていますので読み物としても面白い作品になっています。学生にも社会人にもお勧めです。

3．アルバート=ラズロ・バラバシ著（青木薫監訳、塩原通緒訳）『バースト！人間行動を支配するパターン』、ＮＨＫ出版、二〇一二年七月
　あらゆる歴史上の人物の行動や現代の我々の行動を改めて観察すると、特定の行動は短期間の内に集中的に行われていたというのが本書の中心的な内容です。内容はもちろん面白いのですが、人を説得する上での「ストーリー」の大切さをこの本は教えてくれます。流れるような文章構成を是非実際に読んで体感してみてください。

橋冨博喜（経営ビジネス学科）

1．中野三敏著『江戸狂者傳』、中央公論新社、二〇〇七年三月
　江戸文学研究の第一人者である著者の、縦横無尽につきることのない史料探求の足跡をみることができる。ここで取り上げられる狂者は十二人、いずれも一癖も二癖もありそうな、まさに興味深い人たちである。歴史学のおもしろさをたしかに伝えてくれる。

2．田村隆一著『インド酔夢行』、日本交通公社、一九七六年（講談社文芸文庫、二〇〇八年七月）
　戦後すぐに刊行された詩誌『荒地』同人の田村隆一が書いたエッセイ。学生時代どことなく縁遠いモダニスムにあこがれていたころ手にした一冊。紙のパンツを鞄に入れ、それこそ酒に満たされながらインドの各地を巡り歩く。詩人ならではの感性がその言葉の端々にあふれている。

3．南伸坊著『笑う写真』、マザーブレーン、一九八九年一二月
　写真が真実を伝えると考えているアナタにこの本を贈ります。パロディから始まる写真集？だが、頁を開いていくにしたがって何が現実で何が虚構なのかわからなくなる。その怪しさのなかに身を置いて、本当のこと嘘のことをもう一度考えませんか。同じ著者の『ハリガミ考現学（全）』（ちくま文庫、一九九〇年）もお薦めです。

位田絵美（教養・基礎教育部門）

1．大久保洋子著『江戸の食空間』、講談社学術文庫、二〇一五年五月
　皆さんは、和食を代表する「にぎり寿司」や「てんぷら」が、江戸時代の屋台から始まっていることをご存知ですか。現代でも回転ずしがありますが、江戸の「にぎり寿司」は、立ち喰いのファストフードの代名詞だったのです。「てんぷら」も、一つ一〇〇円前後で売られ、揚げたてのアツアツを食べるのが庶民の楽しみでした。今でいう、ハンバーガーの感覚でしょうか。世界遺産にも登録された和食文化のルーツは、江戸にあります。ぜひ、この本を読んで、そのルーツを楽しんで下さい。

2．叢の会編『江戸の子どもの本　赤本と寺子屋の世界』、笠間書院、二〇一一年三月
　私たちが、小さい頃に読んでいた絵本の『桃太郎』も『金太郎』も『かちかち山』も、

原点は江戸時代の子供向け絵本（赤本）にあります。二〇〇年前の子供たちは、みんなこのお話を聞いて大きくなったのです。なかには、私たちが知っているお話とは、まったく違ったお話だったものもあります。この絵本を開くと、そこには二〇〇年前の子供たちが見た世界が広がっています。

３．斎藤孝著『原稿用紙10枚を書く力』、大和書房、二〇〇四年一二月

テレビで大活躍の斎藤先生が書いた「文章作成のためのアドヴァイス」です。「書くことはスポーツだ」から始まり、「書くことは考える力を鍛える」「書く力とは構築力である」など、なるほどと思わせる内容がギッシリつまっています。文章を書くのが苦手、原稿用紙を見ると頭痛がする、そんな人たちに、ぜひとも読んでもらいたい一冊です。

W. R. Pellowe（教養・基礎教育部門）

１. W. W. Jacobs『The Monkey's Paw』, Oxford Bookworms, 2006年8月

This is a stage one graded reader, which means it is easy for any student to read. It is a horror story about a mysterious monkey paw that grants wishes, but no one is happy about how their wishes turned out. Students have told me that this horror book is scary for them, which means they really became engrossed with it. This is a very popular graded reader, and we have it in our library here at Kinki University.

２. Philip Roth『Goodbye, Columbus』, Vintage International, 1994年1月

I read this novella for an English class during my freshman year of high school (which corresponds to 中学 3年生), so it is a good level for students who wish to challenge themselves with a native-speaker text that is not too long. *Goodbye, Columbus* (first published in the late 1950s) is the story of two young people who have a summer romance, which is strained by the mismatch in their social status: he is from a working-class family while she is from an affluent family; his family is more traditionally Jewish, while hers is more assimilated into mainstream American culture.

３. E.B. White『Charlotte's Web』, HarperCollinsPublishers, 2001年10月

This novel for elementary school children, first published in the early 1950s, is an American classic whose story is so familiar to so many people that references to it can be found in many parts of pop culture. (For example, the gangsters in the film *Pulp Fiction* refer to Wilbur, the pig in this novel.) Students should read this not only for the heart-warming story of friendship and courage, but also to become part of the shared experience of this novel.